



そらばす教室（搭乗支援教室）について



CEマネジメント室
CS推進部

ユニバーサルなサービス ハード♣



ローカウンター



樹脂製車いす



歩行車



ボーディングリフト



コミュニケーション
ボード



ANA Doctor onboard
24時間医療体制「MedLink」

ハード♣



スペシャルアシスタンス
カウンター



遠隔手話サービス



ラウンジ内トイレ



ラウンジ内
ワイドな通路幅



ワイドな搭乗ゲート



ステップレス
搭乗橋



ドクターズキット



ウェブアクセシビリティ
向上



ご予約便運航情報を
SMS, ANAアプリで通知



ラウンジ内
ローカウンター



搭乗橋アダプター



可動式ひじ掛け



車いす対応
トイレ



機内用車いす



ご旅行前

予約

空港

機内

ご到着後

ユニバーサルなサービス ハート♡

ハ
ー
ト
♡



ユニバーサルサービス
実技研修



オープンセミナー
(高齢者施設)



オープンセミナー
(障がい児センター)



そらばす教室



リマインド教育



手話セミナー



高齢者疑似体験



保安会社への教育
コンテンツの提供



心のバリアフリーセミナー



視覚障がい者の方への
ユニバーサル体験



困った人と助けたい人の
マッチング



発達障がいの方への
体験搭乗



ご旅行前

予約

空港

機内

ご到着後

～そらぱすの取り組み～

そらぱす：そらのたびへのぱすぽーと

そらぱす

航空機のご利用が不慣れなお子様などが、空港での手続き・保安検査・機内での過ごしかなど、搭乗から降機までの流れを学習するのが目的。

そらぱすブック

搭乗前の事前準備や搭乗当日の様子を写真付きで解説したガイドブック。



そらぱすビデオ

そらぱすブックの内容を、よりリアルにイメージできるビデオ。



そらぱす教室

ANAグループ社員が特別支援学校に出向いて、空港や機内での過ごし方について体験体感型で学ぶ授業



そらばす教室（搭乗支援教室）



取り組み内容

修学旅行等でANA便のご利用(予定)の特別支援学校に向けて、搭乗前の不安を解消し、安心してご搭乗いただくための特別授業。



対象

特別支援学校※の中学部および高等部のうち、「肢体不自由」または「知的障がい・発達障がい」のある生徒が在籍する学校

※2019年6月～首都圏、2020.5月～札幌地区、関西地区、福岡地区)

授業内容

- ①車いすの方向けプログラム
- ②発達障がい(知的障がい)の方向けプログラム

開催日程と申し込み

2回程度／月(会社が指定した日)。2月と8月に半期分毎(4月～9月・10月～3月)に申し込み。応募多数の場合は抽選



1 お申し込み

授業の一環として行うため
学校単位でお申し込みください

5営業日以内

2 ANAよりご連絡

受付後、事務局より
申し込み受領のご連絡をします

約4～6週間

3 結果のご連絡

開催可能か否かご連絡します

4 事前調整

実施に向けて個別に調整します

5 教材・荷物搬入

お受け取りと保管をお願いします

約1週間前～数日前

6 出張授業

授業終了後、荷物を搬出します

そらばす教室「知的障がい・発達障がいプログラム」の概要

そらばす教室（1回 60分）を通して、ご旅行の前にお困りごとや不安を払しょくし、安心・快適に飛行機をご利用いただけるようになることを目指しています。

👉 飛行機ははじめて。家族としか乗ったことがない。
とっても不安。空を飛ぶって 怖い。
➡安全への取り組み紹介(プレゼン)



👉 乗るまでの手続きが複雑で不安！
次に何をしたらいいの？
➡搭乗までの流れ紹介(プレゼン&動画)



👉 保安検査で“からだ”をさわられるのは、なぜ？
手荷物検査は、なにを検査しているの？
荷物が、なくなったりしないの？
➡保安検査模擬体験



👉 シートベルト、ひとりでできるか心配
➡着脱模擬体験

そらばす教室（搭乗支援教室） 関連記事

【車いすのプログラム】

筑波大学附属桐が丘特別支援学校

<https://news.yahoo.co.jp/byline/toriumikotaro/20190722-00135196/>



YAHOO! JAPAN ニュース IDでもっと便利に新規取得
ログイン [先着順] ヤフオク! ソロ目の日クーポン配布

キーワードを入力

トップ | 速報 | 映像 | 個人 | 特集 | 意識調査 | ランキング | 有料

新着記事一覧 国内 国際 経済 エンタメ スポーツ IT・科学 ライフ

ANA、中高生の障害者が不安なく飛行機で修学旅行に行ける為の出張型事前教室を開始。その授業の中身は？

 島海高太郎 | 航空・旅行アナリスト 帝京大学非常勤講師
7/22(月) 12:10

ツイート シェア B! ブックマーク





CEマネジメント室
CS推進部

「ハート❤️」と「ハード♣️」の両輪で、「すべてのひとに優しい空」を・・・



VRを活用した障害理解の可能性

障害の疑似体験の目的 中野、金沢(2000)

- (障害をもった人たちが)遭遇している不便さやそのときの心理を理解する手がかりを得ること
- ケアやサービスに関する知識、技術、理論の意義を共感的に理解する手がかりを得ること
- 新しい技術や課題等を発見するための手がかりを得ること

障害の疑似体験の目的 庄司 (2014)

- その障害特有の不便さの一部を体験することによって、該当する障害に対する理解を深める
- その障害によって引き起こされる様々な場面での困難状況を想像し理解する
- 困難に遭遇した障害者の心理状況を考える
- 疑似体験した障害だけではなく、他の障害についての理解に応用する
- 自分自身の感じ方だけではなく、一緒に体験した人の感じ方も知る

本研究の目的

自閉症について、コミュニケーション障害について疑似体験の報告はあるが、自閉症のある人たちの、世界の感じ方についての疑似体験の報告は見られない

ここでは、VRを用いて自閉症のある人の感じ方を体験する場を設け、そこで得られたデータを自閉症のある人たちを理解する際の資料とすること

方法

- 対象者
 - ・ 毎週月曜日19時から約90分間実施している学習会への参加者18名
 - ・ 年齢は20代から50代
 - ・ 職業とは学生、保育士、教員、施設職員
 - ・ いずれの参加者も、本動画の視聴もVR体験も初めて
- VR体験用に用いた動画
 - ・ イギリスの自閉症協会がYou tubeに公開しているもの
- VR用の機器
 - ・ Windows Mixed Reality Headset+Motion Controllers FMVHDS I
- 2Dの動画を視聴後すぐにアンケート①を実施、その後VRによる同じ動画の視聴、その後アンケート②を実施
- アンケートは①②ともに UXScale2

結果

- 2DとVRとの比較では、いずれの項目もVRの方が高評価であった。特に差が大きかった項目は、利用可能度では、「期待した通りに動かせる」役立ち度では、「目的達成のために必要かつ十分な機能がある」「賢く応答する」「使い方の自由度が高い」共感度では、「使うことに夢中になれる」「使いこなしていく楽しみを感じさせる」「視覚的な美しさがある」「私のやりたいことにあっている」「愛着を感じさせる」「人に勧めたくなる」であった。
- 自由記述には、「自閉症の人の生きにくさがわかった」「障害のある人にかかわる人は一度は体験すべきである」「教育現場で体験できればよい」「VRの体験は、より理解につながると感じた」「リアルであった」などの感想が書かれていた

考察と今後の課題

- 2DよりVRの方がよりリアルな体験ができることを示唆
- よりリアルな体験は、障害を理解するうえで重要であると考えられるが、特に今回の体験は、自閉症のある人の置かれている状況を想像するうえでも効果があったのではないかと考えられる
- 共感度のそれぞれの項目でVRの得点が高かったことは、VRの方が、自閉症のある人の物の見方に共感しやすいことを示している。加えて、人に勧めたくなるという項目の得点が高かったことは、自閉症のある人たちの感じ方について知り、理解を進めるうえで、効果が期待できることの表れではないかと考えられる
- 準備に時間がかかること、VRの操作に慣れるまでに時間が必要なこと、動画のコンテンツがまだ少ないことが課題
- 疑似体験は、障害理解を促すうえでは欠かすことのできない方法の一つである。より効果的なVRを用いた疑似体験の方法を今後も検討していく必要がある

疑似体験から 障害理解教育を考える

香川大学教育学部
香川大学バリアフリー支援室
附属坂出小学校・附属幼稚園

坂井聡

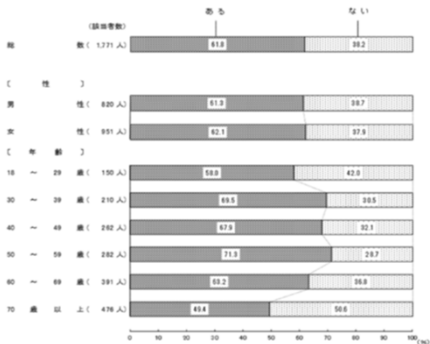
坂井聡

障害者に関する世論調査から 平成29年8月実施

手助けした経験

Figure 1: Horizontal stacked bar chart showing the percentage of people who have helped others, categorized by gender and age group. The chart compares 'Yes' (dark gray) and 'No' (light gray) responses. The x-axis represents the percentage from 0 to 100%.

性別・年齢	人数 (人数)	Yes (%)	No (%)
総計	1,771人	61.8	38.2
性別			
男性	820人	61.8	38.2
女性	951人	62.1	37.9
年齢			
18 ~ 29歳	150人	58.0	42.0
30 ~ 39歳	210人	69.5	30.5
40 ~ 49歳	282人	67.8	32.2
50 ~ 59歳	282人	71.9	28.1
60 ~ 69歳	391人	69.2	30.8
70歳以上	476人	61.8	38.2



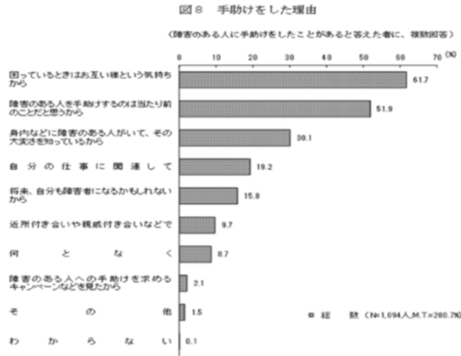
手助けした理由

図8 手助けをした理由

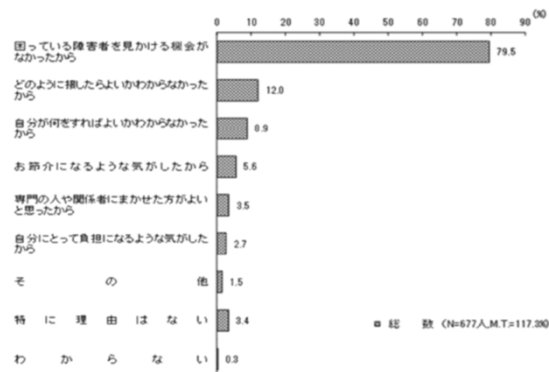
(障害のある人に手助けをしたことがあると答えた者に、複数回答)

理由	割合 (%)
困っているときはお互い様という気持ちから	61.7
障害のある人を手助けするのは当たり前のことだと思うから	51.9
身内などに障害のある人がいて、その大まかを知っているから	38.1
自分の仕事に関連して	19.2
将来、自分も障害者になるかもしれないから	15.8
近所付き合いや親戚付き合いなどで	9.7
何となく	8.7
障害のある人への手助けを求めるキャンペーンなどを見たから	2.1
その他	1.5
わからない	0.1

※ 経 験 (N=1,694人, M.T.×200/70)



手助けをしたことがない理由



この結果から見てくるもの

- 4割もの人が手助けしたことがないと答えている現状
- 4割の人がかかわった経験がないまま社会に
- 学校等では困っている特別支援学級の児童生徒に出会っているはずではないか？
- これまでの学校教育で不足しているものがある
- 障害理解の必要性

ICIDHからICFへ —WHO(世界保健機関)の障害分類—

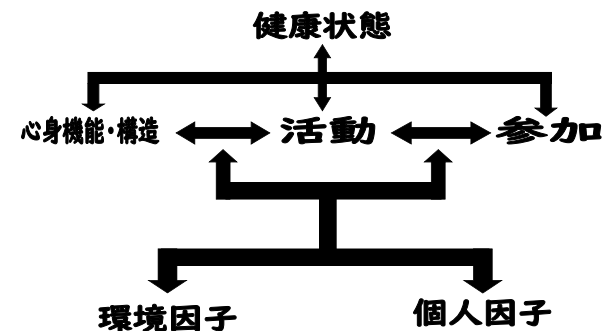
1980年に定められたICIDHでは

機能障害→能力障害→社会的不利 の一方通行の流れ
社会的な環境や物理的な環境の役割を反映していなかった

2001年に公表されたICFでは

生活機能と障害は、心身機能と構造、個人レベルの活動、社会への参加の次元を表す包括的用語として用いられる
障害は健康状態と背景因子との相互作用ないしは複雑な関係と考える

ICFの概念図



通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について (平成24年12月)

知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合(全国の公立小・中学校)

学習面又は行動面で著しい困難を示す	6.5%
学習面で著しい困難を示す	4.5%
行動面で著しい困難を示す	3.6%
学習面と行動面ともに著しい困難を示す	1.6%

障害を社会モデルで伝えることから

障害とは何か
関わる人が知ることから
そもそも専門性とは何か
周囲の人たちにも伝える
本人だけを変えても無理
周囲が受け入れないと
積極的に交流する
本人の自己理解を進める
社会の責任にしても解決しない
合理的配慮の提案

特別支援教育を充実させるための 教職員の専門性向上等

インクルーシブ教育システム構築のため、すべての教員は、特別支援教育に関する一定の知識・技能を有していることが求められる。

特に発達障害に関する一定の知識・技能は、発達障害の可能性のある児童生徒の多くが通常の学級に在籍していることから必須である。

これについては、教員養成段階で身に付けることが適当であるが、現職教員については、研修の受講等により基礎的な知識・技能の向上を図る必要がある。

支援する側が視点を変える

その人はどう考えているのだろうか？
技術をもてば見えるかもしれない

その人が何を苦手としていて、何に困っているのかを考えてみる。
発達障害があるとかないとかではなく

周囲の社会が変わることから
コミュニケーションとれているのか？と考えることから